

研究タイトル:

夏目漱石作品の思想的背景の研究



氏名:	藤本 晃嗣 / FUJIMOTO Akitsugu	E-mail:	fujimoto@yonago-k.ac.jp
職名:	講師	学位:	博士(比較社会文化)
所属学会・協会:	日本近代文学会、日本近代文学会九州支部		
キーワード:	日本近代文学、夏目漱石、思想、漢学		
技術相談 提供可能技術:	<ul style="list-style-type: none"> ・夏目漱石に関すること。 ・日本近代文学に関すること。 ・小説の読みに関すること。 ・日本近代における漢学に関すること。 		

研究内容: 夏目漱石の作品から読み取れる思想的背景の研究

夏目漱石(1867-1916)の作品における思想的背景を、特に儒学や禅などの伝統思想と明治期に受容された西洋思想との交わりの中から研究しています。

一例をあげると、漱石に明治末の東京を舞台とした『それから』という作品があります。主人公である代助は、大学を卒業しても父親の金銭的援助をたよりに気ままな生活を送りながら、父親の「誠は天の道なり」というような儒学的な価値観を馬鹿にしていました。この代助が、最後は親友である平岡の妻三千代に告白します。この代助の行動は、周囲の人々の迷惑を顧みず、自らの考えを貫くという点で「近代的自我」の表れであると解釈されてきました。ところが小説の本文に、代助が三千代へ告白するとき、自分が馬鹿にしていたはずの「誠」を強く意識する記述があります。そこで、日本近世儒学における「誠」の意味を探っていくと、実は代助の行動が近世儒学における「誠」の考えと一致することがわかります。つまり、代助の行動は、近世儒学思想の「誠」の表れとしても捉えることができるのです。

私たち日本人の考え方や価値観は、明治以降の西洋思想の受容によって大きく変化したと言われますが、それまでの伝統思想がいきなり途絶えるわけでもなく、また西洋思想が「そのまま」受け入れられたわけではありません。伝統的な考え方と近代になり新しく入ってきた考え方は、衝突し融合しながら、新たなものを形成してきたと考えられます。そのような思想の変化のあり方を、文学作品を通して人々が生きる具体的な状況をもとに考察しています。

担当科目	現代文 I、文学
過去の実績	
近年の業績 (研究・教育論文、特許含む)	<ul style="list-style-type: none"> ・著書: 藤本晃嗣『漱石と儒学・禅—西洋思想との交わり—』、花書院、2022年3月 ・学術論文: 藤本晃嗣「夏目漱石と漢学—談話「落第」の「漢学者になつた処が仕方なし」をめぐって—」、近代文学論集、47号、2022年3月 ・学会発表: 藤本晃嗣「夏目漱石と漢学—『野分』を中心に—」、2021年度 日本近代文学会九州支部秋季大会、2021年10月 ・学術論文: 藤本晃嗣「講演「現代日本の開化」における「内発的」、「外発的」について—ウィリアム・ジェームズとの関わり—」九大日文、34号、2019年10月 ・分担執筆: 山口直孝編『漢文脈の漱石』、幹林書房、2018年3月(藤本晃嗣「漱石の禅認識と『禅門法語集』—「虚子著『鶏頭』序」、『夢十夜』「第二夜」、『行人』「塵労」を中心に—」を担当) ・学会発表: 藤本晃嗣「夏目漱石と禅の伝統—『行人』を中心に—」、2016年度日本近代文学会秋季大会、2016年10月